

〔研究報告〕

母親の乳がん罹患にともなう思春期の子どもの困難 —質問紙調査の自由記述の分析から—

大城 怜¹⁾ 上別府圭子²⁾

要 旨

目的：本研究は、母親の乳がん罹患にともなう思春期の子どもの困難を明らかにすることを目的とした。

方法：病院3施設と患者会2施設で実施した乳がん患者とその家族が経験する心理的变化に関する自記式質問紙調査のうち、12-18歳の乳がん患者の子どもが回答した自由記述欄の回答データを使用した。分析は内容分析を用いた。

結果：有効回答97部のうち、自由記述欄に回答があったのは27部であった。分析では、思春期の子どもは母親の乳がん罹患により、【『乳がんに罹患した母親』として、母親を想う中で生じる困難】、【自分自身に起きた意識の変化】、【家族内での家族員との関わりや自身の役割に対する困難】、【がん患者家族として周囲と関わる際の困難】を経験していることが明らかになった。

結論：家族員である母親の乳がん罹患という出来事が、子どもの思考に影響を与え、家族との関わりに変化を及ぼし、さらには家族以外との関わりにも影響を及ぼす具体的な内容が示された。看護支援として、母親が自身の疾患の状況を正確に伝えられるようサポートすること、同じ経験や気持ちを共有できるピアサポートを紹介することの必要性が示唆された。

キーワード：がん患者、思春期の子ども、母親、乳がん、自由記述

1. 緒 言

日本人女性の乳がん罹患数において、2018年に新たに診断された乳がん患者数は93,000例を超えており依然1位である（国立がん研究センターがん情報サービス, 2021）。乳がん罹患率の最初のピークである40歳代後半は子育て世代にあたるため、未成年の子どもをもつ乳がん患者は少なくない。親のがんへの罹患が未成年の子どもにも与える影響について海外の文献レビュー論文によると、頭痛や食欲低下を含む身体面、睡眠の質の悪化や周囲との衝突を含む行動面、不安や抑うつ、恐怖、孤独感を含む心理

面など、子どもの健康関連QOLの低下につながる多方面の影響が示されている（Visser, Huizinga, Van der Graaf, et al., 2004; Walczak, McDonald, Patterson, et al., 2018）。また、乳がん罹患した母親をもつ11から24歳の子どもにおいて、3から4割の子どもが強いストレス症状や精神的苦痛を抱えていることが明らかになっている（Edwards, Watson, St James-Roberts, et al., 2008; Chan, Lomma, Chih, et al., 2020）。国内では、がん患者を親にもつ未成年の子どもを対象とする調査は真部らの研究に限られるが、乳がん患者の子どもは、21人中の約50%が自分の情緒・行動について問題意識をもっていること、心的外傷後ストレス症状を呈していたのは56人中の52%であり、母親と同程度の割合であっ

1) 兵庫医科大学

2) 国際医療福祉大学

たことを明らかにしている（真部，2011）。よって、母親の乳がん罹患を経験する未成年の子どもへの支援構築は重要課題であると考えられる。

親ががんの診断を受けると家族の日常生活は一変する。そして、子どもは家族内の雰囲気の変化には非常に敏感であり、親の状態の悪さや緊張感を感じとる（小林，2013）。治療の過程で子どもに病気を隠し通すことは難しく、子どもの年齢や発達段階、性格、理解力などを十分に考慮し支援を検討することが重要とされる。しかしながら、思春期の子どもは、親のがんへの罹患に対して不安や心配、怒りの感情を抱きつつも、親からの自立をはじめとした発達段階にあるがゆえに、親や周囲とは話をしながらないことも多い（小林，2013）。そのため、子どもの成長を支える役割を担う家族や医療者は、思春期の子どもが母親の乳がんへの罹患によって、どのような経験をしてきたのか、どのような思いを抱えているのかについて、具体的に知り、理解することは容易でない。また、前述したように、国内における研究は十分に実施されていないことから、子どもの経験の詳細な記述を積み上げて、必要な看護を見いだしていくことが重要であると考えられる。

そこで、本研究は乳がん罹患した母親をもつ思春期の子どもを対象に実施した質問紙調査で得られた自由記述欄の回答を分析することにより、母親の乳がん罹患にともなう思春期の子どもの経験について、先行研究で示されている困難の具体的な内容を明らかにすることを目的とした。本研究により、看護師などの医療者が思春期の子どもの経験を具体的に理解することができ、効果的な支援内容の示唆が得られると考える。

1. 目的

母親の乳がん罹患にともなう思春期の子どもの困難を明らかにすることを目的とした。

2. 用語の操作的定義

思春期：12から18歳の児童期から成人期へ移行する人間性の形成にかかわる重要な時期とした

困難：母親の乳がん罹患によって、思春期の子ども

に生じた身体的・心理的・社会的な悩みや困りごととした。

II. 方法

1. 研究デザイン

本研究は、「乳がん罹患した女性の家族が経験する心理的变化とその関連要因に関する研究」（Oshiro, Tanabe, Tada, et al., 2023）の一部として実施した。乳がん患者とその家族に実施された自記式質問紙調査のうち、乳がん患者の子どもが回答した自由記述欄の回答データを使用した質的記述的研究デザインである。

2. 研究協力施設・調査期間

研究協力施設は首都圏のがん診療連携拠点病院3施設とがん患者や乳がん患者を支援する法人団体（以下、患者会）2施設であった。調査期間は2019年2月から2019年8月であった。

3. 対象

10年以内に乳がん診断され、乳がんに対する標準治療を受けた母親をもつ子どもであり、次の包含基準を満たす者とした。①質問紙への回答時に12から18歳の中学生以上である、②母親が乳がん罹患していると知らされている、③知らされた時の年齢が7歳以上である、④母親と同居していることとした。除外基準は、母親もしくは保護者が身体的または精神的に研究への参加が困難であると判断した者とした。

4. 調査内容

子どもへの質問紙の最後に配置した自由記述欄において、「お母さんが乳がんになったという経験をしたことで、あなたが困っていることや悩んでいることはありますか。」と尋ねた。質問紙へ回答した者の属性や精神状態を確認するために、子どもの年齢、性別、教育機関、乳がん罹患を知らされた時の年齢、乳がん罹患を知らされてからの期間、乳がん罹患を知らされた時期、乳がんに対するストレスの程度（5件法；1＝全然ストレスはない、から5＝も

のすごく強いストレスだった), 母親の年齢, 乳がんのステージ, 過去と現在の治療状況のデータを使用した。このうち, 母親の年齢, 乳がんのステージ, 過去と現在の治療状況, 乳がん罹患を知らされた時期のデータは, 母親への質問紙調査から使用した。

5. 調査手順

調査は病院または患者会のいずれかで実施し, それぞれ異なった手順で実施した。病院3施設では, 研究者もしくは施設の調査責任医師が包含基準を満たす子どもをもつ乳がん患者を選定した。外来にて担当医から乳がん患者に本研究について簡潔に説明した後に, 研究者が研究説明文書を用いて直接説明を行い, 乳がん患者より書面にて研究参加の同意を得た。子どもへの研究説明は, 研究者から行う希望がなければ乳がん患者から説明してもらうよう依頼した。研究者より質問紙一式が入った封筒を配付し, 質問紙への回答を依頼した。子どもは同意書に署名したのちに回答し, 質問紙の返信とともに同意書を同封してもらった。

患者会では, 患者会の運営責任者が包含基準を満たす子どもをもつ乳がん患者を選定し本研究の目的や内容について記載したメールを一斉送信し, 研究参加者を募った。研究参加の意思がある場合, メールに記載した所定の入力画面に進み, 「氏名」「住所」「連絡先」「研究者による詳しい研究説明の希望の有無」を入力するよう依頼した。研究者からの詳しい研究説明を希望しない場合, 入力された住所宛に質問紙一式が入った封筒を郵送し, 質問紙への回答を依頼した。詳しい研究説明を希望した場合, 研究者より詳細な研究説明を実施した。子どもへの研究説明は, 研究者から行う希望がなければ乳がん患者から説明してもらうよう依頼した。子どもは同意書に署名したのちに回答し, 質問紙の返信とともに同意書を同封してもらった。

子どもが回答した質問紙は, 母親や保護者が内容を見ることのないように子どもが自ら返信用封筒へ封入するよう依頼した。質問紙には研究用IDを付け, 乳がん患者とその子どもの質問紙が連結できる

ようにした。

6. 分析

自由記述欄に回答した者の特徴, および回答しなかった者との属性等の違いを確認するため, 子どもの年齢, 性別, 教育機関, 乳がん罹患を知らされた時の年齢, 乳がん罹患を知らされてからの期間, 乳がん罹患を知らされた時期, 乳がんに対するストレスの程度, 母親の年齢, 乳がんのステージ, 過去と現在の治療状況について記述統計を算出後に比較した。量的変数にはWelchのt検定を, 質的変数にはFisherの直接確率検定をそれぞれ実施した。統計ソフトはIBM SPSS Statistics version 24.0 (SPSS, Inc., Chicago, USA) およびR version 3.3.3を用い, 有意水準は両側5%とした。

自由記述欄で得られた回答から「母親の乳がん罹患に伴って生じた思春期の子どもの困難」に関して意味のとれる文脈に注目し, 文脈を損なわないように文節で区切り, 記述内容(コード)を抽出した。意味内容が類似するものを集めてサブカテゴリーを作成し, 続いてさらに抽象度の高いカテゴリーとしてまとめた。

7. 厳密性の確保

分析は内容分析の経験をもつがん看護, 成人看護, 家族看護の研究者4名とがん看護専門看護師1名のスーパーバイズを受けながら実施した。記述内容(コード)の抽出, サブカテゴリーとカテゴリーの作成, それらをまとめる過程で, 共同研究者間で一致を認めるまで討議を行った。

8. 倫理的配慮

筆頭著者が所属する医学部倫理審査委員会(承認番号:12079(1))と調査協力施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した。研究参加者に対して, 本研究の参加は自由意思であること, 不参加や同意を撤回した場合でも不利益が生じないこと, 調査は無記名で行い個人が特定されないことを説明文書と質問紙の表紙に記載し, 説明した。

子どもに対する配慮として, 乳がん患者に対し, 子どもへ配付する質問紙を必ず確認した上で, 子ども

もへの研究説明や参加の可否を判断するよう依頼した。研究説明文書は、子どもが容易に理解できるよう文章をより簡潔にしたものを配付した。子どもへ配付する同意書には、本人と保護者の署名欄を設け、双方の同意を確認できるようにした。返送された質問紙と同意書は別々に保管し、質問紙の匿名性を保つよう努めた。病院では、各施設のチャイルド・ライフ・スペシャリストへ研究協力を依頼し、質問紙への回答によって心理的苦痛が生じた際のサポート体制を確立したのちに、調査を実施した。

III. 結果

乳がん患者に配付した子どもの質問紙は129部であり、このうち107部が返送された。回答の欠損な

どで除外した97部を有効回答とした。97部のうち、自由記述欄に回答のあったのは27部であった。

1. 自由記述欄に回答した者の属性 (表1)

27名の平均年齢は14.3歳であり、女性が17名(63.0%)だった。全ての項目において、回答しなかった70名と有意差はなかった。

2. 母親の乳がん罹患にともなう思春期の子どもの経験 (表2)

12のサブカテゴリーが抽出され、【『乳がん』に罹患した母親』として、母親を想う中で生じる困難】、【自分自身に起きた意識の変化】、【家族内での家族員との関わりや自身の役割に対する困難】、【がん患者家族として周囲と関わる際の困難】の4つのカテゴリーにまとめられた。各カテゴリーについて以下に概説する。カテゴリーは【 】に、サブカテゴリー

表1. 自由記述欄に回答した者と回答しなかった者の比較

N = 97

	回答あり (n = 27) 回答なし (n = 70)		p
	Mean ± SD or n (%)		
年齢 (歳)	14.3 ± 2.2	14.9 ± 1.9	.166
性別			.259
	男性	36 (51.4)	
	女性	34 (48.6)	
教育機関			1.000
	中学校	38 (58.5)	
	高等学校	27 (41.5)	
乳がん罹患を知らされた時の年齢 (歳)	12.2 ± 2.4	12.7 ± 2.7	.399
乳がん罹患を知らされてからの期間 (年)	2.2 ± 1.9	2.3 ± 2.4	.812
乳がん罹患を知らされた時期			.875
	診断の直後	31 (45.6)	
	直後ではないが、治療開始前	32 (47.1)	
	治療による体の変化が出た後	5 (7.3)	
	治療が終わった後	0 (0.0)	
乳がんに対するストレスの程度 ^a	2.6 ± 1.1	2.3 ± 1.2	.322
母親の年齢	45.2 ± 3.8	46.4 ± 4.1	.187
母親の乳がんのステージ			.515
	0	3 (4.6)	
	I	29 (44.6)	
	II	21 (32.3)	
	III	7 (10.8)	
	IV	5 (7.7)	
過去の治療状況 (複数回答)			.990
	乳房全摘術	25 (35.7)	
	乳房部分切除術	31 (44.3)	
	ホルモン療法	11 (15.7)	
	化学療法	32 (45.7)	
	放射線療法	32 (45.7)	
現在の治療状況			.304
	定期検査のみ	13 (18.6)	
	ホルモン療法中	43 (61.4)	
	化学療法中	8 (11.4)	
	放射線療法中	2 (2.9)	
	手術後、病理結果待ち	4 (5.7)	

Notes. 欠損値を除く

Abbreviations. SD = standard deviation.

a 1 = 全然ストレスはない～5 = ものすごく強いストレスだったで区分

表2. 母親の乳がんの罹患にともなう思春期の子どもの困難

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容 (コード)
『乳がん罹患した母親』として、母親を想う中で生じる困難	母親の乳がんの進行・再発を想像する	再発するかもしれないのでこわい また母親が乳がんになってしまったらと思うと、どうすればいいか悩んでいる 母親が病院に検査をしに行く日は不安になる
	母親が長く生きることや乳がんが再発しないことを願望する	病気になったけれど、お母さんが長生きしてほしい 再発してほしくない
	母親の『死』を意識する	時折寝る前お母さんが死んじゃうんじゃないかとドキドキして悲しくなる人はいつか必ず死ぬことはわかっているけれど、お母さんが病気になったことで早く亡くなってしまいそうで少しこわい
	母親の体調を気にかけ、心配する	お母さんが病気になる前より疲れ易くなったり、小食になったりしていて少し心配 退院後の母は弁当や料理を無理して作ってくれたりして、また倒れないか心配だった お母さんがきつそうにしていることが多い
自分自身に起きた意識の変化	将来がんになる可能性を意識する	自分も同じようにがんになるかもしれないという心配や不安がある 祖母も乳がんを経験しているので、もしかしたら遺伝するかもしれないと感じることが少しある 自分もいつか遺伝で乳がんになるのかと思うと心配
	『死』を意識する	前より『死』について考えることが多くなった
家族内での家族員との関わりや自身の役割に対する困難	母親への接し方に悩む	治療中に母がマイナスな気持ちになり落ち込んでいる時に、どんな言葉をかけたり何と言ってあげれば、何をすればいいかわからない時がある 母がしばしば『どうせ先も長くないだろうから』といった、長生きすることに否定的な発言をする。真剣に言っているわけではないが、再発の可能性も消えたわけではないので、冗談と受け入れられない時もある
	家族内での役割を担う	母が退院して家に帰って来てから、動けない時にお手伝いをするのが大変 次に母親が入院する時期に一人で早起きできるか心配 母親が倒れた時の対応がわからない 自分が頑張らなければと思った
	家族内における不安や不満を抱く	乳がんの治療費が大変で生活が苦しそうで、このままどうなるか不安 お父さんが全く協力的でないことが不満ですが、どうしようもありません
がん患者家族として周囲と関わる際の困難	友人との関わり方に悩む	小学校の時に友人から『乳がんの人って髪がないんだって』と言われ、乳がんのことをわかっていないのに、そんなことを言われて少し嫌だった 友人に母親の乳がんのことを言いたくてスッキリしたいが、伝えられない 誰に何を話したらいいのか、話す意味もわからず、友人や先生に何も打ち明けられなかった 友だちに『お母さん病気?』と聞かれた時にどう対応したらいいかわからない
	周囲とのギャップを感じた	母親が乳がんになって家事をこなす日々が続く中で、友人や周り『何かがちがう』という感覚が根強くあった
	不安を周囲に表出しない	このままどうなるか不安、だけど、お母さんが大変だから、自分は明るくふるまっている

は〈 〉に、記述内容 (コード) は「 」に示す。

1) 【『乳がん罹患した母親』として、母親を想う中で生じる困難】

思春期の子どもは、母親を、『乳がん罹患した母親』として想う中で様々な感情を抱いており、このカテゴリーには、〈母親の乳がんの進行・再発を想像する〉、〈母親が長く生きることや乳がんが再発

しないことを願望する〉、〈母親の『死』を意識する〉、〈母親の体調を気にかけ、心配する〉の4つのサブカテゴリーが含まれた。

思春期の子どもは、日々の生活の中で〈母親の乳がんの進行・再発を想像する〉経験を記述していた。

「再発するかもしれないのでこわい。」

「母親が病院に検査をしに行く日は不安になる。」

そして、〈母親が長く生きることや乳がんが再発しないことを願望望む〉思春期の子どもの姿がみられた。

「病気になったけれど、お母さんが長生きしてほしい。」

「再発してほしくない。」

乳がんの進行や再発の有無に関わらず、〈母親の『死』を意識する〉ことがあり、悲しさや怖さを経験していることが示された。

「時折寝る前お母さんが死んじゃうんじゃないかとドキドキして悲しくなる。」

「人はいつか必ず死ぬことはわかっているけれど、お母さんが病気になったことで早く亡くなってしまいそうで少し怖い。」

乳がんや治療による身体への侵襲や無理をしていないかを子どもは敏感に感じ取ろうとし、〈母親の体調を気にかけ、心配する〉様子が記述されていた。

「お母さんが病気になる前より疲れ易くなったり、小食になったりしていて少し心配。」

「退院後の母は弁当や料理を無理して作ってくれたりして、また倒れないか心配だった。」

2) 【自分自身に起きた意識の変化】

母親の乳がん罹患をきっかけに、子ども自身に変化が見られた。これは、〈将来がんになる可能性を意識する〉、〈『死』を意識する〉の2つのサブカテゴリーで構成された。母親の乳がん罹患によって、自身も母親と同じように〈将来がんになる可能性を意識する〉ようになり、心配する様子が抽出された。「自分も同じようにがんになるかもしれないという心配や不安がある。」

「自分もいつか遺伝で乳がんになるのかと思うと心配。」

また、母親の乳がんをきっかけに、〈『死』を意識する〉という変化を経験していた。

「前より『死』について考えることが多くなった。」

3) 【家族内での家族員との関わりや自身の役割に対する困難】

家族員である母親が乳がんと診断されることによって、家族の内部で起きた子どもの困難が抽出された。〈母親への接し方に悩む〉、〈家族内での役割

を担う〉、〈家族内における不安や不満を抱く〉の3つのサブカテゴリーが含まれた。

乳がん罹患した後、母親に対してどのような声掛けや態度が良いのか、〈母親への接し方に悩む〉子どもの姿が示された。

「治療中に母がマイナスな気持ちになり落ち込んでいる時に、どんな言葉をかけたり何と言ってあげれば、何をしてあげればいいかわからない時がある。」

「母がしばしば『どうせ先も長くないだろうから』といった、長生きすることに否定的な発言をする。真剣に言っているわけではないが、再発の可能性も消えたわけではないので、冗談と受け入れられない時もある。」

思春期の子どもが〈家族内での役割を担う〉経験も示された。

「母が退院して家に帰って来てから、動けない時にお手伝いをするのが大変。」

「自分が頑張らなければと思った。」

乳がんに影響を受けた〈家族内における不安や不満を抱く〉様子が示され、経済面の気がかりや父親に対する不満が記述された。

「乳がんの治療費が大変で生活が苦しそうで、このままどうなるか不安。」

「お父さんが全く協力的でないことが不満ですが、どうしようもありません。」

4) 【がん患者家族として周囲と関わる際の困難】

母親が乳がん罹患すると、子どもはがん患者の家族となる。家族の中にもがん患者がいる者として周囲と関わる際の困難が示された。〈友人との関わり方に悩む〉、〈周囲とのギャップを感じた〉の2つのサブカテゴリーで構成された。

母親の乳がんについて、友人へ打ち明けられない悩みや聞かれた時の対応への困難感が〈友人との関わり方に悩む〉に示された。

「小学校の時に友人から『乳がんの人って髪がないんだって』と言われ、乳がんのことをわかっていないのに、そんなことを言われて少し嫌だった。」

「友だちに『お母さん病気?』と聞かれた時にど

う対応したらいいかわからない。」

〈周囲とのギャップを感じた〉では、具体的な出来事ではなく漠然とした違和感が記述された。

「母親が乳がんになって家事をこなす日々が続く中で、友人や周り『何かがちがう』という感覚が根強くあった。」

IV. 考 察

母親の乳がん罹患は家庭での役割に大きく影響し、他の家族員にとっても危機的な出来事とされる (Burstein, Winer, 2000)。思春期の子どもは、母親の乳がん罹患によって直接的な影響を受けることは多くないが、【『乳がん罹患した母親』として、母親を想う中で生じる困難】を抱いていた。また、母親の乳がん罹患をきっかけとして、【自分自身に起きた意識の変化】が示された。そして、【家族内での家族員との関わりや自身の役割に対する困難】を経験し、家族以外との関わりでは【がん患者家族として周囲と関わる際の困難】を経験する姿が本研究より明らかになった。家族員である母親の乳がん罹患という出来事が、子どもの思考に影響を与え、家族との関わりに変化を及ぼし、さらには周囲との関わりにも影響を及ぼしており、がん患者家族としての困難を思春期の子どもの視点から表している内容だと解釈した。そのため、思春期の子どもを中心に、家族の階層性から3つの視点を用いて考察した。

1. 母親の乳がん罹患が思春期の子どもの思考に与えた困難

思春期の子どもは、【『乳がん罹患した母親』として、母親を想う中で生じる困難】を抱き、【自分自身に起きた意識の変化】を経験していた。母親が乳がん罹患した出来事から、〈母親の乳がんの進行・再発を想像し〉、〈母親の『死』を意識する〉だけでなく、自分自身も〈将来がんになる可能性を意識〉していた。がん罹患した親をもつ子どもは、健康な親をもつ子どもに比べ、自分の将来の健康や乳がんの遺伝に対する心配が有意に高かったと報告

する研究 (Cappelli, Verma, Korneluk, et al., 2005) を支持する具体的な記述が示されたといえる。乳がん罹患した母親をもつ8から18歳の子どもを対象とした調査によると、子どもは乳がんという疾患や治療についての基本的な知識はもっていること、それは母親や家族からだけでなく、学校での勉強や書籍、インターネットなどから得ていることが明らかになっている (Huang, O'Connor, Hu, et al., 2017)。自ら情報を検索できる年代である一方、マスメディアで有名人の乳がん罹患や乳がんによる死亡が度々報道される現状も含め、情報を集める過程の中で「死」「再発」「遺伝」などの言葉が子どもに強い印象を与えると推察される。それらの言葉や情報は、時に子どもの不安を一層強くさせること、また自身の乳がん発症リスクに対する心配など新たな不安の出現につながる可能性がある。

乳がん罹患した母親は、病気を子どもに伝えることを控える理由として、子どもに精神的苦痛を与えたくない、伝えなくてはならない情報ではない、などを挙げている (瀧澤, 牧野, 2022)。しかしながら、母親が子どもの状況を推察するのではなく、子どもがどう感じているのか、気になることがないかなど、子どもの意思を確認していくことの必要性が示された。

2. 母親の乳がん罹患が思春期の子どもの家族との関わりに与えた困難

家族との関わりでは、【家族内での家族員との関わりや自身の役割に対する困難】を抱く様子が示された。家族は、母親と子、父親と子、きょうだいなど、独特の関係で成り立ついくつかのサブシステムを形成する。このカテゴリーでは、このサブシステムにおける困難が具体的に示された。母親と子どもの関係では、〈母親への接し方に悩む〉において、母親への言葉かけや態度に悩む様子が記述された。また、経済面や将来への不安や、父親と子どもの関係が、〈家族内における不安や不満を抱く〉に示された。家族には、家族員一人の出来事が家族全体や家族員との関係に影響を及ぼすという特性がある。

これらの記述は、母親の乳がん罹患という出来事が、家族全体や子どもと家族員の関係にも影響を及ぼしている状況を具体的に表す内容だといえる。さらに、小林（2013）によると、思春期の子どもは親を支えることができる年齢ゆえに、親への気遣いや責任感がある。これらの記述は子どもが自分自身に目をむけるだけでなく、母親や家族を思い、関心を向けている様子を表しているといえる。家族の一員として、他の家族員へ気を遣い、時に苦悩することは思春期の子どもに特徴的な経験であると考えられる。

また、〈家族内での役割を担う〉では、母親の乳がん罹患や治療によって家族内に生じた自身の役割に対する思いが記述された。子どもはそれらの役割を時に大変だと感じ、不安な気持ちを抱いていた。一方で、未成年の子どもをもつ親に関する文献レビューでは、自身のがん経験を、子どもが人生の苦楽を学ぶのに良い方法であると考えられるなど、がん罹患を子どもの成長の糧とすることを望む姿があった（田村、内堀、本田、他、2019）。母親の乳がん罹患が子どもの家庭生活に影響を与えることは避けられない。それらの困難を子どもが受け止めて乗り越えられるよう、子どもの頑張りを労うこと、必要時は家族内の役割を再調整するなどの関わりも必要だと考える。

3. 母親の乳がん罹患が思春期の子どもの家族以外との関わりに与えた困難

思春期は発達段階でも友人関係に悩む時期ではあるが、母親の乳がん罹患によって、より一層苦悩する様子が【がん患者家族として周囲と関わる際の困難】に抽出され、〈友人との関わり方に悩む〉姿が明らかになった。がん患者の子どもは同世代の友達には話せず一人で溜め込んでしまうことが多いと指摘されているように（小林、2013）、本研究の対象者も打ち明けられない苦悩が記述された。乳がんはセクシャリティに関わる疾患であることから、性に敏感なこの年代では友人側の気持ちや母親側の気持ちを配慮することが打ち明けられない苦悩をまねく要因の一つとなっている可能性がある。一人で辛さや不安を溜め込むことで、〈周囲とのギャップを感じた〉こ

とに繋がりが、さらに子どもを追い詰めてしまう。

がん罹患した親は、病気のせいで子どもが周囲から心無い言葉を浴びせられることを心配し、子育てに関する自己肯定感も低いことが報告されている（藤本、神田、2017；田村、他、2019）。子どもが周囲との関わりに困難を抱えることで、親もまた悩み、申し訳なさを感じると推察される。思春期の子どもが、がん患者家族としてどう感じているのか、どのように周囲と関わっているのか、子どもの問題ではなく、家族の問題として捉えることが重要と考える。そして、友人との関わりや学校での様子には注意して目をむける必要がある。

4. 看護への示唆

発達段階の特徴から、思春期の子どもは自身のことを親とは話をしたくない可能性があるが、本研究によって多くの不安や心配、悩みを抱えていることが明らかになった。乳がん罹患した母親をもつ思春期の子どもへの看護支援として、まず重要なことは母親の疾患の状況を正確に伝えることだと考える。子どもは母親の乳がんの進行や再発、死、体調に対する不安を多く抱えていた。この年代は自ら情報を検索できるため、家族や医療者は説明しなくても乳がんに対する理解はできていると判断してしまう可能性があるが、その情報が正しくない場合や強い印象を与える言葉も多い。そのため、子どもの受け入れや気持ちを確認しながら、母親の治療内容、副作用、体調の変化、遺伝に関する情報など、状況を正しく理解できるように正直に丁寧に伝えることが必要である。医療者が思春期の子どもと関わる機会は多くない。そのため、疾患の状況については、まず母親が子どもへ正確に、冷静に伝えることができるように支援することが大切である。また、母親と相談しながら、必要に応じて、子どもと看護師が直接対面できる機会を設けることも検討するべきだと考える。

子どもとの関わりについて、乳がん患者は医療者へ相談することを望む場合もある（Sinclair, Schofield, Turner, et al., 2019）。よって、思春期の子ども

もへのケアについては、家族内で解決するのではなく、医療者も支援できる立場にあることを乳がん患者や子どもに伝え、必要時に頼ることができるように環境を整えることが重要である。友人へ打ち明けられない苦悩も明らかになったことから、無理に打ち明けなくてもいいことを伝え、必要であれば同じ経験や気持ちを共有できるピアサポートを紹介することも有効だと考える。

5. 本研究の限界

第一に、本研究の参加者は調査への参加、質問紙への回答が可能な者であった。そのため、子どもが母親の乳がん罹患を受容できていない場合や保護者が質問紙への回答が難しいと判断した場合は本研究の調査へ参加していない。よって、本研究の結果は、母親の乳がん罹患にともなう経験を振り返ることのできる精神状態にある子どもの解釈に限られる。第二に、本研究は質問紙調査の最後に配置した自由記述欄に回答があった者のみを分析対象としている。自由記述欄に回答がなかった者と属性の差がないことを確認し、子どもの性別や年齢、母親の乳がんのステージ、治療状況などで偏ることなく、思春期の子どもの経験を抽出したと推測するものの、回答がなかった者の意見が反映されないというバイアスが挙げられる。自由記述欄に回答がなかった者は困難を感じていなかった、もしくはより困難を感じていた可能性があり、具体的には複雑な心理やつらい心境、怒りなど、表現をはばかれる感情が抽出されていない可能性がある。また、自由記述欄に回答した者は27名と少ない。今後は、分析対象者を増やすこと、質問文を検討すること、面接法を採用することで母親の乳がん罹患にともなう子どもの経験について、より多面的に捉える必要があると考える。また、本研究では父親やきょうだい、祖父祖母など母親以外の家族員との具体的な関わりが明らかになっていない。母親以外の家族員の言動もまた、思春期の子どもに大きな影響を与えると考えられるため、追加の研究も今後の課題となる。最後に、対象者は10年以内に乳がんと診断された母親をもつ

者とした。診断後の期間が異なることで対象者が経験する内容に違いがあると推察される。今後は、診断からの期間や母親の乳がんの状況によって、記述内容に違いがあるかを検討する必要がある。

V. 結論

本研究は、母親の乳がんへの罹患にともなう思春期の子どもの困難について、質問紙調査で得られた自由記述欄から具体的に明らかにした。子どもは、『乳がん罹患した母親』として、母親を想う中で生じる困難を抱え、自分自身に起きた意識の変化を自覚していた。そして、家族内での家族員との関わりや自身の役割に対する困難を、家族以外ではがん患者家族として周囲と関わる際の困難を経験する姿が示された。看護支援として、母親が自身の疾患の状況を正確に伝えることができるようにサポートすること、必要であれば同じ経験や気持ちを共有できるピアサポートを紹介することの必要性が示唆された。

利益相反

本研究に際し、開示すべき利益相反はない

謝辞

本研究は平成30年度公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金の助成を受けた。本研究に御理解と御協力いただいた研究参加者の皆様、調査協力施設の皆様、御助言を頂きました一般社団法人キャンサーベアレンツさま、兵庫医科大学神崎初美教授、鈴木志津枝特任教授、井上満代准教授、山内洋子助教に心より感謝申し上げます。

各著者の貢献

第一著者は研究の発案、研究デザイン、データ収集、データ分析、データの解釈、論文執筆の全プロセスを行った。第二著者は、研究プロセス全体への助言を行った。全ての著者は、論文の最終稿を確認して投稿に同意した。

{ 受付 '22.08.24 }
{ 採用 '23.03.27 }

文 献

- Burstein H. J., Winer E. P.: Primary care for survivors of breast cancer, *New England Journal of Medicine*, 343 (15): 1086-1094, 2000
- Cappelli M., Verma S., Korneluk Y., et al.: Psychological and genetic counseling implications for adolescent daughters of mothers with breast cancer, *Clinical Genetics*, 67 (6): 481-491, 2005
- Chan A., Lomma C., Chih H. J., et al.: Psychosocial consequences in offspring of women with breast cancer, *Psycho-Oncology*, 29 (3): 517-524, 2020
- Edwards L., Watson M., St James-Roberts I., et al.: Adolescent's stress responses and psychological functioning when a parent has early breast cancer, *Psycho-Oncology*, 17 (10): 1039-1047, 2008
- 藤本圭子, 神田清子: 初発乳がん患者が罹患に伴う情報を小学生の子どもに伝える決断のプロセス, *日本がん看護学会誌*, 31: 66-75, 2017
- Huang X., O'Connor M., Hu Y., et al.: Communication about maternal breast cancer with children: A qualitative study, *Cancer Nursing*, 40 (6): 445-453, 2017
- 小林真理子: がん患者と子どもに対する支援—親ががんであることを子どもに伝えるためのサポート—親のがんを子どもにどう伝え、どう支えるか, *がん看護*, 18 (1): 57-61, 2013
- 国立がん研究センターがん情報サービス: 「がん統計」(全国がん登録). https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/data/dl/index.html#a14. 2022年7月1日
- 真部 淳: 厚生労働科学研究費補助金がん臨床研究事業働き盛りや子育て世代のがん経験者, 小児がんの患者を持つ家族支援の在り方についての研究, 平成20~22年度総合研究報告書, 13-21, 2011
- Oshiro R., Tanabe M., Tada K., et al.: Post-traumatic growth and cancer-related communication among adolescents having mothers with breast cancer, *Supportive Care in Cancer*, 31 (7): 446, 2023
- Sinclair M., Schofield P., Turner J., et al.: Maternal breast cancer and communicating with children: A qualitative exploration of what resources mothers want and what health professionals provide, *European Journal of Cancer Care*, 28 (6): e13153, 2019
- 瀧澤理穂, 牧野智恵: 乳がん患者が子どもに病気について伝えることを控える理由に関する文献検討, *石川看護雑誌*, 19: 85-91, 2022
- 田村里佳, 内堀真弓, 本田彰子, 他: 未成年の子どもをもちがんに罹患した親の子育てにおける経験に関する研究の動向と課題, *家族看護学研究*, 25: 2-13, 2019
- Visser A., Huizinga G. A., Van der Graaf W.T.A., et al.: The impact of parental cancer on children and the family: A review of the literature, *Cancer Treatment Reviews*, 30 (8): 683-694, 2004
- Walczak A., McDonald F., Patterson P., et al.: How does parental cancer affect adolescent and young adult offspring? A systematic review, *International Journal of Nursing Studies*, 77: 54-80, 2018

Difficulties Faced by Adolescent Children of Mothers with Breast Cancer: An Analysis of Free Description of Questionnaire Survey

Rei Oshiro¹⁾ Kiyoko Kamibeppu²⁾

1) Hyogo Medical University

2) International University of Health and Welfare

Key words: cancer patient, adolescent, mother, breast cancer, free description

This study aimed to investigate the difficulties faced by adolescent children of mothers with breast cancer. It was part of a self-administered questionnaire survey of breast cancer patients and their families conducted in three hospitals and two peer support groups. We used the response data in the free description provided by 27 children of breast cancer patients aged 12 to 18 years. Participants reported facing difficulties such as “thinking of their mother as a breast cancer survivor,” “changes in self-consciousness,” “relationships with family members and one’s role in the family,” and “interacting with others as a cancer patient’s family member.” Maternal breast cancer affected adolescents, caused changes within the family, and affected relationships around the family. To support these adolescents, it is necessary to help mothers accurately inform the children about their illness and, if necessary, introduce them to peers with whom they can share similar experiences and feelings.